

徒然想

『情報』をどう伝えるべきか ～ボールは我々の手元にある～

新都心レディースクリニック 甲斐 敏弘

情報は誰のものか？誰の『ため』のものなのか？ここでは我々が行っている市民健診・検診の『情報』について考える。

大宮医師会ではさいたま市との委託契約によって各種健診・検診を行い、大宮医学会総会の場で、その成果や反省点について報告を行ってきている。それぞれ会員の先生方のご努力によって一定の成果をあげていることがよくわかる。そして多くの検討では「受診率向上」が結論の一つになることが多い。

受診者個々への検診結果は伝えられているだろうが、ではそれ以上に伝えることはないのだろうか？我々の活動は最終的に社会に還元されているのだろうか？もう一歩踏みこむ必要はないのだろうか？

行政が行うべきことが多くあるのは論を待たないが、我々の強みは専門家として受診者と直接対面する立場にあることである。対面での結果説明は日常臨床を妨げる煩わしい義務ではなくもっと前向きに捉えたい。

多くの検診専門施設では検査結果は郵送するが多いが、そもそも検診結果票に示された「判定」のA、B、C、D（これも施設ごとに文言が異なる）は誰がどう決めたものか、少なくとも受診者も了解したうえで使っているものではないだろう。「所見」欄に多くの文言が書かれていればAでもBでも素人が不安になるのは当然だろう。「6カ月後再検」、「1年後再検」の文言は、その検診施設を受診しろという意味か保険診療でどこかを受診しろという意味が分からない。（保険診療での受診を勧めるのなら、せめて「どの位置にどんな所見があるか」までを明確に記載すべきだが、ひどい場合は左右すら記載のない結果票がある）すでにこの段階で「要精検」と同義と感じ保険診療で受診する人もまた多いはずだ。「それは受診者自身で判断しろ」、「結果票をきちんと読み込めば分かるはず」と言っているのと同じだ。（これこそ守りに入って、突き放しているどこかの行政機関と同じだ）

対面で説明することの意義はこれを明確に指示できることにある。受診者の既往や性格、リスク、反応の状態を確かめて受診者に直接説明することができる。「ボールは我々の手元にある」のだ。

さらに検診でいつも問題となるのは、受診していない人をどうするのか。広く「一般市民」へ「受診率向上」の意義は伝えられているのだろうか。real worldの情報は我々しかもっていないはずだ。

世はネット社会であるし、ネットに疎い私と同世代の人口は徐々に縮小化し、ネット情報はますます肥大する。リテラシーの問題を嘆くより前に、我々はより大きい声で伝えるべきだ。そうでなくとも、ネットでは、間違った情報、作画的に切り取った情報、揶揄、悪口、誹謗中傷で溢れていて、これらが持続的に蔓延し拡散している。我々は正しいこと、real worldの情報を負けずに伝えるべきではないだろうか。そのためのチャンネルは複数あってよい。

講演会の形式での公開市民講座、ホームページ、SNS（Instagram、LINE、X、Facebook）、

YouTube 動画などだ。そして受診者にもそのチャンネルを QR コードで伝えればよい。受診者が以前から疑問に思い、それでも質問まではできない疑問があるだろう。その入口となる Q&A チラシを手渡し、Answer はホームページや SNS に展開する。さすれば情報は常に更新され、生きの良い情報を提供できる。リテラシーの問題を嘆くより前に、我々は大きい声で伝えるべきだ。まずは「対外」、「対市民」として複数のチャンネルを揃えていくこと、そのチャンネルに繋がる糸口を揃えることが必要ではないか。我々は市民健診・検診を通して、正しいことを正しくやってきた。その検討もしている。そして知りえたリアルワールドの情報は我々の手の内にある。やってきたこと、努力したことは、きちんと公言してよい。

医師会が何を行っているかを一般の人達にはあまり伝わっていない。かつて私自身もよく知らなかった。一般市民にとって、「主治医」は身近であっても「主治医集団」としての「医師会」は何をしているか分からない集団だろう。ならば言うて聞かせればよい。正しいことをやっている団体だから大きい声で伝えられることがあるはずだ。ボールは我々の手元にある。

